

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、省略した部分がある）。

ある日の下校時、同じグループの友達である「海堂」に命令され、「須野木」のランドセルを蹴った「ユウ」は、自分のしたことへの嫌悪感が消えず、家に帰り、おやつを食べるとすぐに須野木がザリガニ釣りをしている河川敷へと向かった。

「なあ、なんか、言えよ」

須野木はこつちを見て、戸惑うような表情を浮かべた。

眉を八の字にして、落書きされた犬みたいな顔だ。

「なんかって言われても……。なにを言うたらえんか、わからへんし」

「いや、なんでもいいから、思ってること、言うたらいいやろ」

「べつに、なんも、思えへんし」

「なんも思ってるへんわけないやろ」

ちよつと強い口調で言ったら、須野木は弱々しい声で繰り返した。

「そやけど、ほんまに、なんも思ってるへんし……」

10 なんも思ってるへん、って、アホか？ アホなんか？ なんで、ちゃんと、自分の思ってることを言われへんねん。

「そうやって黙るから、あいつらも調子に乗るんやって。ムカついたら、ちゃんと伝えろよ！」

謝ろうとしていたはずが、俺は須野木にイラつき、なぜか、喧嘩の一手手前みたいになってしまう。

こんなつもりで来たわけじゃないのだ。

俺は須野木のために……。

15 「ええこと、教えたるわ」

そう言いながら、大きく拳を振りあげて、須野木に殴りかかろうとした。真似ただけだ。本当に当てたりはしない。

（中略——その後、仕方なくザリガニ釣りをやめた須野木に、ユウは自分の身を守る方法（護身術）を具体的に教え始めた——）。

「ユウくんって、強いんやな」

ぼんやりした声で、須野木はそんなことを言う。

強い？ 俺が？

20 ほんまに強かったら、たぶん、あのとき、ちがう方法があったはずや。

海堂に言われて、須野木のランドセルを蹴ってしもうた。みんながやってたから、自分もやった。

あれは、俺の弱さや。

① 強くなりたいって、思ってるのに……。

俺はまだまだ、^a ミジユク者なんや。

25 「特訓したら、だれでもこれくらいできるようになる」

（中略）

「俺が殴りかかるから、まずは倒すところ、やってみ」

せつかく俺が特訓の相手をしてやるうというのに、須野木は首を横に振った。

「いいよ、そんなん」

「ええから、やれって！」

30 「でも……」

ぐずぐず言っていると、気合を入れる、気合を。

「ビビんなんて。痛いことはせえへんから」

むしろ、こっちは倒されてやるつもりなのだ。

俺が殴りかかろうとすると、須野木はまたぎゅつと目を閉じた。

35 「だから、目、つぶんなんて！」

体も強張^{こわば}らせて、立ちすくんだまま、自分からは動こうとしない。

「俺の手、こうやって掴めよ。それで、こつちに押し倒す感じで」

わざわざ須野木の手を握^{にぎ}って、自分の腕を掴ませる。

「なんで、ここまでせなあかんねん。」

自分からもっとセッキョク的に動いて、身につけようとしろよな。俺なんか、父親相手にどんだけ練習したと思うねん。

「いいから、ほんまに」

須野木は俺の手を振り払^{はら}うようにして、そんなことを言った。

「なんや、それ、ちゃんとせえよ！」

やる気のない須野木に、こつちはイライラした。

負けたら悔^{くや}しいやろ？ やられたら、やり返したいやろ？ ちゃうんか？

俺が怒鳴^{どな}ると、須野木は申し訳なさそうな顔をして、つぶやいた。

「暴力とか、嫌いやし」

そんなん、俺かって、暴力は嫌いや。

でも、だからこそ、護身術は覚えといたほうがええんちゃうのか。

50 「あんな、これは自分の身を守るために、やってることや。暴力と護身術はべつもんやろ」

そんなふうにいいつつ、自分でもよくわからなくなってきた。

② 須野木が本気で嫌^{いや}がっているなら、俺のやっていることは……。

「ええから、ちよつとだけでも練習しとけて。倒すっていうても、実際にやらんでもいいねん。ただ、やり方を知っておくっていうのが、重要やから。いざとなったら倒せるっていう自信が、オーラみたいになって、いじめられへんようになんねんって」

55 いじめ、っていう言葉は使いたくなかった。けど、気づいたら、口から出ていた。

「でも……」

「うるさい！ ごちやごちや言うてんと、かかって来いっちゅうねん！」

言いながら、須野木に殴りかかる。

やっぱり、須野木はその場でぎゅつと目を閉じた。

60 こいつ、さっきの俺の話、なんも聞いてへんやん……。

俺はパンチを寸止めする。そして、だらんと腕をおろす。

「おまえなあ」

なんか、もう、怒^{おこ}る気力もなくなってきた。

「そんなんやったら、やられっぱなしやで。ええんか？」

あきれた声で言うのと、須野木はぼそぼそと答える。

「うん。まあ、耐^たえられへんようになったら、逃^にげるし」

「逃げる、つて……。やり返さへんつもりなんか？ 絶対に？」

「たぶん」

こいつ、どうしようもない根性なしやな。

70 「もうええわ！ 勝手にいじめられとけ、ボケ！」

特訓して、鍛^{きた}えたらうと思っただけど、無駄やった。

俺が怒鳴^{どな}っても、須野木は言い返したりしない。

A あさつての方向を見て、ぼんやりしている。

謝^{あやま}ろうと思っただはずなのに、なにを言うてるんや、俺は。

75 つぎの瞬間、須野木は「しっ！」と言うと、人差し指を口に当てた。それから、耳を澄^すますようなそぶりを見せる。

「なんや？ なんか、聞こえたか？」

俺が黙ると、須野木は顔を上に向けて、空を指さした。

「ノスリ」

青い空に、黒っぽい鳥の影が見えた。

80 「あれ、カラスちゃうんか？」

「ちがうよ。鳴き声、聞こえたし。ピーーエーって、鳴いてたやろ。これがピーヨロロやったらトンビやけど、ピーーエーやからノスリや」

鳥の鳴き真似^{まね}をしながら、須野木はそう言い切る。

85 よく見てみると、たしかにカラスとはちがって、茶色っぽい鳥だった。タカみたいにも見えるが、少し小さい。翼を広げ、空をゆつたりと横切り、どこかに飛んでいく。

しばらく空を見あげていたあと、須野木はザリガニ釣りをしていたところに戻った。
なんやねん、こいつ。

ほんま、マイペースなやつや。

90 ザリガニ釣りをするのかと **思いきや**、須野木はしゃがんで、バケツを手を取った。そして、水面に向かって、バケツをひっくり返して、ざあっと中身を流す。ザリガニたちが後ろ向きに跳ね、水の中に **ちらばる**。

空っぽになったバケツをその場に置いて、須野木は歩き出した。

「バケツ、持って帰らへんのか？」

「うん。もとから、ここにあつたから」

須野木と並んで、俺も歩く。

95 「どこ行くつもりや？」

「もう帰る」

俺が言いたかったこと、ちゃんと伝わったんやろか。

須野木を見ている感じでは、いまいち、わかってないような気がした。

ほんまに強くなれなくても、強い気持ちさえあれば、負けへんようになるんや。

100 そのことを、須野木にもわかって欲しかった。

「なあ、須野木。おまえ、明日も、ちゃんと学校、来るよな？」

いちおう、訊いてみると、須野木は **C** **きよとんとした顔**で、こつちを見た。

「うん。行くつもりやけど、なんで、そんなこと訊くん？」

なんで、つて……。

105 もし、俺があんなことされたら、学校に行きたくないって思うに決まってるからだ。

でも、須野木はちがうんやろか。

こいつ、気にしてないふりをしてるんやなくて、ほんまに、なんも、気にしてないのかもしれない。

「須野木って、毎日、ザリガニ釣りしてんの？」

歩きながら、俺は訊ねる。

110 「うん、まあ、だいたい」

「おもしろいん？」

「うん」

「なにが、そんなにおもしろいわけ？」

115 「なんやろ……。わからへんけど、好きやから、ザリガニ釣り」

歩いていると、また鳥の鳴き声が聞こえた。

今度は、空からじゃなく、近くから響く。

「あつ、あれ」

俺は須野木よりも先に、その鳥を見つけた。

草のあいだに、うずくまるようにして、一羽の小さな鳥が鳴いていたのだ。ほわほわした短い毛に覆われていて、まだヒナみたいだ。

「怪我でもしてんのかな」

120 そつちに近づこうとしたら、須野木が素早く、俺の腕を掴んだ。

「あかんつて！」

びっくりするほど迫力のある声で、須野木は言った。

「なんで？ ヒナみたいやし、助けたらうや」

125 「あかんつて言うたら、あかんねん！ 人間が近づいたら、親鳥が帰って来られへんようになるやろ！」

俺の腕を掴んだまま、須野木は早口で話す。

こいつ、**d** **ケツコウ**、力あるやん……。

130 「あのヒナは、巣立ちのために飛ぶ練習中で、たぶん、近くに親鳥もいるはずやから、そつとしいたほうがええねん。俺、前に、一回、それで失敗してるから。なんも知らなかったときに、ヒヨドリのヒナを見つけて、助けたらなあかんと思って、拾って、持って帰つてん。でも、結局、育てられへんくつて」

須野木はそう話しながら、とても悔しそうな表情を浮かべていた。

ランドセルを蹴られても、へらへらしていたくせに……。
 「そんなときに、本とかで調べたら、ヒナを拾うのは誘拐ゆうかいみたいなもんやって書いてあった。だから、こついうときは放っておくのが一番ええねん。かわいそうやからって、助けようとしても、それって結局は、人間の*エゴやから」
 須野木はきつぱりと言うのと、射るような強い視線で、俺のほうを見た。
 こんな目も、できるんやんか……。

ようやく、俺は気づいた。
 須野木と俺は、ちがう人間なんや。

こいつの大事なものは、俺とは全然ちやうところにある。

③『ごめん』

なんで知らんけど、自然とそう言っていた。

「わかってくれたんやったら、ええねん」

須野木は、テれくさそうに笑うと、俺の腕から手を離はなした。

じんじんと痛む腕をさすりながら、俺はまた須野木と並んで、河川敷を歩いた。

(藤野恵美『淀川八景』より)

* エゴ…自分のことを中心に考えて行動すること。

問1 ——線部 a と e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 ——線部 A と C のここでの意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A あさつての方向を見て

- ア 怒った顔を見たくないのわざと目をそらすようにして
- イ この場から逃げだそうと体の向きを急に變えて
- ウ 興味がないので全く関係のない方に視線を向けて
- エ やつとあきらめてくれたと安心したので正面を向いて
- オ これからどうなっていくのか心配で手元をじっと見つめて

B 思いきや

- ア 思っているとっぜんと突然
- イ 思っていたが意外にも
- ウ 思っていたがいつの間にか
- エ 思っていたがやはり
- オ 思っているとさりげなく

C きよとんとした顔

- ア 戸惑とまどい目を見開いた顔
- イ 相手を疑い目を細めた顔
- ウ あわてて目が泳いだ顔
- エ 意図を探ろうと目をこらした顔
- オ 理解できずに目をふせた顔

問3 ——線部①「強くなりたいうって、思ってるのに……」とありますが、「ユウ」の目指す強さとはどのような強さですか。三十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問4 ——線部②「須野木が本気で嫌がっているなら、俺のやっていることは……」とありますが、このときの「ユウ」の気持ちを七十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問5 ——線部③『ごめん』なんで知らんけど、自然とそう言っていた」とありますが、このときの「ユウ」はどうして素直すなおに謝ることができたのですか。その理由を百字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問6 この文章の内容や表現について説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「落書きされた犬みたいな顔だ」(3行目) という比喻を用いることで、須野木がいじめられているのは、はっきりと発言できない須野木自身に問題があるのだということを読者に対してわかりやすく示している。
- イ 「もうええわ！ 勝手にいじめられとけ、ボケ！」(70行目) という乱暴な言葉を用いて、須野木をあえて突き放すような発言をしていることから弱気な須野木をなんとか奮い立たせようとしていることが読み取れる。
- ウ 「じんじんと痛む腕をさすりながら」(144行目) という擬態語を用いた表現は、須野木に腕を掴まれた痛みと共に、これまで知ることのなかった須野木の一面がユウの心の中に深く印象付けられていることを表している。
- エ 「須野木と並んで、俺も歩く」(94行目)、「俺はまた須野木と並んで、河川敷を歩いた」(144行目) という同じような表現が使われることで、異なる性格を持つ二人の関係が深まり、ユウは須野木の不思議な魅力に夢中になっていることが読み取れる。
- オ 文章全体を通して関西弁を用いていることから、いじめという重いテーマを取り上げるにあたり、読んだ印象を少しでも明るいものにして、多くの人がいじめを考えるきっかけになればと願う筆者の配慮が感じられる。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合上、省略した部分がある)。

手紙を書くとき、返事が気になるものだ。早く返事が来ないかと心待ちにする。返事が来て、いそいそと封を開けるときのちよつとしたときめきは忘れられないものだ。それが恋文、ラブレターのときは特に。

亡くなった妻、*1河野裕子の遺品の整理に実家へ行ったとき、箱にしまわれているラブレターの束を見つけた。彼女から私へ送られたもの、私から彼女へ送ったもの、総数300通ほどもあっただろうか。私は知らなかったのだが、二人がそれぞれ保管していたものを一緒にして大切に箱にしまい、実家の押し入れに保管していたものらしい。

ほとんどが封書。お互いの家族にはあまり見られたくないこともあったのだろうが、それ以上に葉書では伝えられないほどの思いを伝えたいということが大きかったのだろう。(中略)

返事は待ち遠しいが、あまりにも早く返ってきてしまうのは、**A** 興ざめなものでもある。「待つ」という期待の時間を奪われてしまうからだ。a ソウオウの時間をかけて書いた手紙に、あっけなく返事が返ってきたら、うれしさがちよつと*2希釈されたように感じないだろうか。

B いまはメールの時代である。*3 ツイッターとか、ラインとか、私などにはもうついていけない世界が広がっているのを痛感するが、今や時代遅れなのかも知れないコンピュータからのメールでさえ、その文面がきわめて短くなっていると感じざるを得ない。

C ケータイメールの世界では、来たらすぐに返事をするというのが当然のこととされているらしい。返事は2、3日寝かせてからということはずまないようなのだ。すぐに返さないと仲間外れにされるとも聞いたことがあるが、本当なのだろうか。

返すまでの時間の短縮を優先すれば、当然内容が希薄に、かつ短くならざるを得ない道理である。相槌のようなものである。勢い、出来あいの言葉で取り敢えず済ませてしまう。例の「あ」と打てば「ありがとう」と変換してくれる、予測変換機能などが、この*4迅速な対応におおいにb キョしているのだろう。言葉に神経を使っている暇などはない。

D ツイッターというのは、最大文字数が140字までなのだそうだ。つまりこれらはすべて、通信の内容は(すばやく、短く)を原則としているように見える。

私も日々メールのお世話になっており、いまやそれができない生活は考えられない。しかし一方で、メールは思いを伝えるのに適した通信手段だろうかと考えると、**①必ずしもそうだと答えられない自分がいることにも気づく。**

メール、特にケータイメールの短いやり取りは、(用を足す)という目的のためには最適であろう。「あと5分で着くからね」と、昔は(私などは今でも)電話で伝えていたところをメールで送る。これで用は足りる。

しかし、これであるままとまった思いを、そして自分が何を考えているのかを相手に伝えようとするのは、まず無理である。140字で思いが伝えられると思えるだろうか。短歌ではわずか三十一文字で思いを伝えるではないか。名言と言われる文句はたいして短いながらも寸鉄人を刺すような*5警句もあるぞ、と言われれば確かに可能ではある。しかし、それらは短い言葉になるまえに、言葉を見つめるまでの圧倒的な長さの時間を経てきたものなのだ。さらっと出たものではない。

特に肉筆で手紙を書いていた頃、書くという行為のなかで、自分の考えが徐々に整理されていくのを実感できた。出来あいの誰もが使う言葉を避け、自分の実感にもつとも*6フィットする言葉を探しながら書くという行為は、自分の考えを整理するとともに、思ってもいかなかった考えの飛躍をもたらすことがある。

言葉にする前は、何かc シンエンなことを考えているようでも、実はほとんど何も考えていないに等しかったということとはよくあることだ。その不徹底さは、実際に手紙を書きはじめると、実は何を書きたかったのかさえわからなくなるような混乱として終ることも珍

しくもない。つまり、私たちはそれほどにも、日常ものを突きつめて考えると言うことが少ないのだ。(中略)

ケータイメールやツイッターは、*7 独断の誹りを覚悟で言えば、**②「思考の断片化」を促進する**という危険性を持っているのではないかと、私は思っている。

誰かからのメールが届くと、打てば響くようにそれに返信をする。すぐまた別の友人からのメールが届く。まったく違った内容であろうが、それにも返信する。そのような間髪を容れず多くのメールへ対応するという習慣は、私たちから一つのことをじっくり考えるという習慣を奪ってしまう危険性を持っている。それはすなわち、「自己へ向かう」という大切な時間を奪ってしまうものでもある。

「思考の断片化」も怖しいが、気がつかないうちに陥ってしまう、もう少し「ヤバイ」危険性は、既存の考え方の枠の中に自分を押し込めてしまうことなのかもしれない。

できるだけ形容詞を使わないで、自分の感じたことを表現する大切さについてはすでに述べた。自分だけが感じたことを伝えるためには、万人の共通感覚の **ヒョウショウ** である形容詞に頼らないことは、基本中の基本である。

この形容詞のもっとも現代的なバージョンが、絵文字というものであるかもしれない。絵文字、顔文字など多くのものが使われており、悲しいという表情だけでも、何十種類もあるらしい。時おり人からもらうメッセージにこんな顔文字が入っていたりすると、それはなかなか楽しいものではある。

文章のアクセントとしては、その意味はあるのだろうし、思わず頬が緩むということも効果の一つであろうが、いっぽうで感情表現がこのような既成の絵文字によって代替されてしまうことは、やはりまずいのではないかと私は思っている。絵文字にせよ、顔文字にせよ、それらは多くの人たちの、ある感情の最大公約数であろう。形容詞のもっとも一般化されたものといってもいいかもしれない。

メールの短さの制限から、そのような顔文字を使うのは、効率的であることはまちがいない。しかし、自分の今の考えや感情を、どの絵文字を使えば、いちばん近いだろうと選ぶ作業は、自分の感情をどう表現しようかというよりは、すでに用意されているパターンのどれに該当するかを択ぶ、当てはめるという作業にすり替わっているのだとも言える。

最大公約数としての絵文字にすり寄るような形で自分の感情を整理してしまうことは、自分という、他にはないはずの存在に対して、あまりにも無責任な対応ではないかと思うのである。たぶん、「私」は、それらあらかじめ用意されたどれとも違う「悲しい」をいま感じているはずなのである。それらを掘り起こしてやらなければ、自分が可哀そうではないだろうか。絵文字を受け取って楽しいと思う感情とは、**ウラハラ**に、**③私はそんなありきたりのパターンに当てはめられてしまう対応が嫌いでもある**。

短い言葉だけで〈用を足す〉生活に慣れ過ぎると、ものごとを基本に立ち返って考えるという習慣に乏しくならざるを得ない。〈用を足す〉だけの短文で、身のまわりの友人や、まして恋人と繋がっていて、ほんとうに大丈夫なのか、と**④余計な心配**をしたくもなるのである。

(永田和宏『知の体力』より)

- *1 河野裕子：筆者の妻で歌人。二〇一〇年に亡くなる。
- *2 希釈：うすめること。
- *3 ツイッターとか、ラインとか：いずれもインターネット上のサービスで、コミュニケーションの道具として利用されている。
- *4 迅速：きわめて速いこと。
- *5 警句：短い形で物事の真理をついた言葉。
- *6 フィット：ぴったりとあうこと。
- *7 独断の誹り：自分勝手な判断だと非難されること。

問1 — 線部 a s e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2

A

D

 に入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい(ただし、同じ記号は二度使えません)。

ア どうやら イ かえって ウ おまけに エ まして

問3 — 線部①「必ずしもそうだと答えられない」とありますが、なぜそのように筆者は思うのですか。六十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問4 ——線部②『思考の断片化』を促進するという危険性」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から
選び、記号で答えなさい。

- ア 間髪を容れず多くのメールへ対応していると、既存の思考の枠の中に自分を押し込めてしまうしかなくなってくるということ。
- イ 打てば響くように返信することだけを考えているので、他者を思いやるような大切な時間を確保できそうにもないということ。
- ウ まったく違った内容のメールにすぐに返信するため、頭の中が混乱し考えていたことが思い出せなくなってしまうということ。
- エ 多くのメールにすばやく返信することに重点が置かれ、一つのことをじっくり考える習慣が奪われてしまっているということ。
- オ 誰かからのメールが届くと、すばやく返信しなければならぬため、その時考えていたことを中断せざるをえないということ。

問5 ——線部③「私はそんなありきたりのパターンに当てはめられてしまう対応が嫌いでもある」とありますが、それはどういうこと
とですか。八十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問6 ——線部④「余計な心配」とありますが、それはどのような心配ですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記
号で答えなさい。

- ア 最近の若い人の間では、大切な人に自分の思いを伝える言葉がどんどん短くなっており、その言葉で相手が本当に理解してくれ
るのかという心配。
- イ 用事を済ませるのに使うような短い言葉だけで大切な人とやり取りをしていて、はたして本当にお互いを理解し合っているのだ
ろうかという心配。
- ウ 短い言葉だけで会話のやりとりを済ませることに慣れてしまうと、大切な人に対する態度も横着なものになってしまうのではな
いかという心配。
- エ 大切な人に大事な事柄ことばらを伝える時に、相手を楽しませる要素を持つ顔文字などを使ってしまつて、相手は真剣しんけんに取り合つてくれ
るのかという心配。
- オ いざ自分の感情を大切な人に面と向かつて伝えようとするときに、短い言葉を重ねるだけで語い力が身につけていないのではな
いかという心配。

三、次の俳句の空欄くうらんにあてはまる言葉を後の語群からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 世の夏や()に浮うかむ浪の上 まつおほしよし松尾芭蕉
- 2 たまに来た()の月は曇りける こはやしいつき小林一茶
- 3 夢さめて聞くは蛙かわけの()かな りょうかん良寛
- 4 ()や門なき寺の天高し よさぶせん与謝蕪村
- 5 一人と()につく夜寒かな こばやし小林一茶

(語群)

- ア 帳面 ちやうめん
- イ 遠音 とおね
- ウ 寒月 かんげつ
- エ 故郷 こきやう
- オ 湖水 こすい

